

河岸緑地における人の行動パターン分析—基町環境護岸を事例として—

広島工業大学 学生会員 ○内田 圭
 広島工業大学 正会員 今川 朱美

1. 目的

本研究では、基町護岸緑地を対象に河岸緑地での人の活動を録画し、VTR 分析により空間要素に対する行動パターンを分類する。また、ヒヤリング調査により、周辺地域との関わりについても FROM-TO（どこからどこへ）分析を行う。これらの定量的データに基づき河川空間の利用状況を明らかにし、河川空間整備への提言を行う。河岸緑地の活用状況を分析することにより、河川空間を見直し、河川空間の利用を促進、活動を誘導することが可能となる。今後の河川緑地の計画に向けた調査手法の確立が本研究の目的である。



図1 調査対象地の位置

2. 調査概要

基町環境護岸の空鞆橋より上流の基町高層アパート付近において、上流側と下流側の2か所にカメラを設置し撮影を行った。調査日は平日1日、土日の2日のそれぞれ季節ごとに選定し合計12日で、観測時刻は6:30~8:30、11:00~13:00、17:00~19:00の計6時間で、冬季は日没時間を考慮し16:00~18:00で行った。なるべく晴天を見込まれる日で調査を行ったが、日にちごとで天候の崩れもあり雨天で調査を行った場合もあった。

3. 河岸緑地の利用実態

利用実態調査からその結果を示す。集計は性別、年齢、グループ数、利用行動に分類し行った。まず「性別」に季節の差はなく、男性が約7割、女性が約3割の利用であった。「グループ数」ではコロナ感染症による自粛もあり、1人で訪れている人が9割を占めていた。また、「年齢別」では大学生以上を大人と見立て、7割を占めていた。時間帯別の特性としては、平日は通勤通学路としての利用が多いため、朝・夕と昼の利用者数の増減（朝：昼：夕=3：1：3）が顕著であった。高齢者は季節や時間帯で利用者数に変化は見られなかった。

利用行動は、季節に限らず自転車の通り抜けが多かった。休日は平日に比べ利用者数が減少するものの、多様な行動が認められた。雨天時は、利用者数は減少し、遊歩道における自転車と歩きの通り抜けに偏っていた。FROM-TO に関しヒヤリング調査を計51名に行ったところ、FROM は基町や中区の周辺地域のほかに安佐南区などの利用もあり、多方面からであるが、TO では中区や横川への利用が多かった。基町環境護岸を目的としている人も多数認められた。

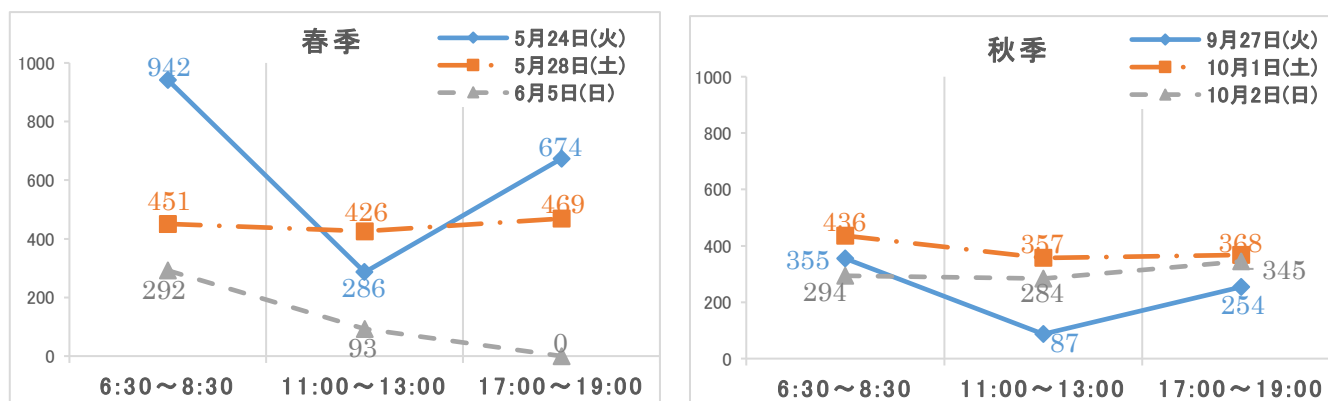


図2 利用者数の経時変化

キーワード 河川空間、河岸緑地、行動分析、河川景観、パターンランゲージ

連絡先 〒731-5193 広島市佐伯区三宅 2-1-1 広島工業大学工学部環境土木工学科 TEL082-921-6131 千

4. 行動分析

利用実態調査から活動内容を表 2 のように分類した。利用実態調査から活動内容を表 2 のように分類した。

表 1 活動内容のパターンの分類

移動型	自転車・歩き/ウォーキング、ジョギング/犬の散歩
運動型	犬の訓練/体操 /ゴルフ練習/ ボール遊び/虫取り
拠点型	バーベキュー・テント/座り込み・ベンチ/釣り

「移動型」では、連続的に行われる通り抜けと散策行動が見られた。空間的特性として、①北端にて急に視界が開けると人が拡散する。②樹木が仕掛けとなり人の動きに変化が起こる。③小テラスな

どの水面や対岸へ風景眺望できる場所で佇み。④移動ルートは遊歩道と水辺、ニセアカシアと遊歩道の間の3つのルートが多い。セッティングされた遊歩道が主なルートとなるがそれを除けば人の移動は水辺に誘導されることがわかった。

「運動型」は、体操を除き広く平たんな場所で川と平行に活動が行われ、空間要素の影響をあまり受けず、朝に多く見られる傾向にあることがわかった。「拠点型」では、バーベキューは調査範囲の上流側や樹木周辺で陣を組むように、座り込みはポプラ・ニセアカシア周辺と水辺に分布している。河川と関連性がないように思われるベンチ利用や水辺の座り込みであるが、視線はどちらも対岸方向に向けた状態で着座していた。さら着座時間を計測しところ、ベンチ利用は計 119 組で、その 6 割が 5 分以内の利用であった。水辺の座り込みは計 53 組で、大半が 10 分以上滞在していた。また、夏季の利用者は 6 組と他の季節の半数であるが、平均 1 時間ほどの滞在を記録している。長時間の利用がされていた。

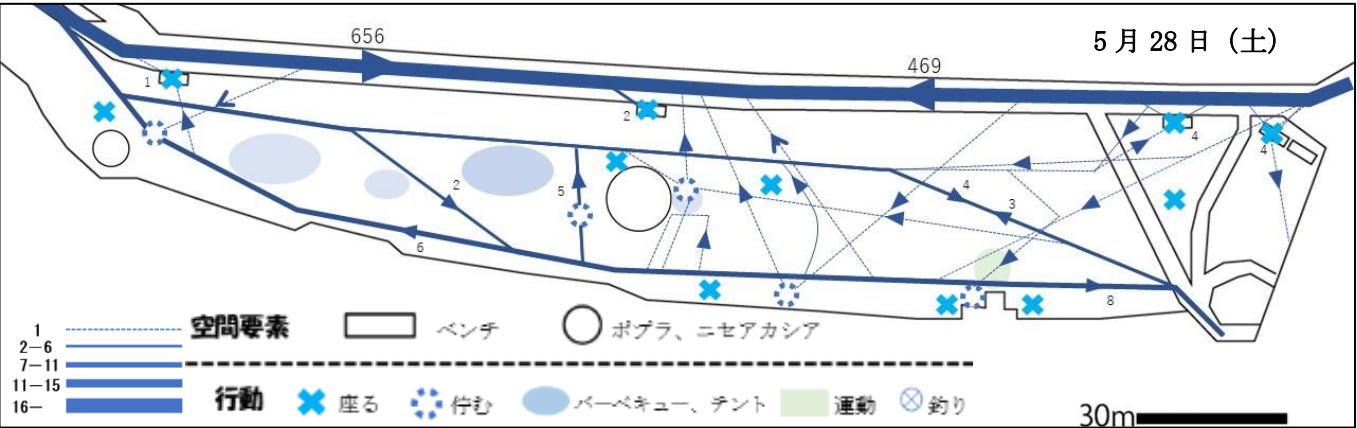


図 3 春の移動状況図

5. 結論

基町環境護岸における調査で分かったことは主に 4 つである。①行動パターンは「移動型」「運動型」「拠点型」に分類でき、移動型が多数を占める。②移動ルートは遊歩道が主となるが、水辺近くなどへも分岐する。③移動ルートや活動拠点は、空間要素に影響を受ける。④25 年前と比べ利用者数は増加しているが水辺での活動があまり見られない。

得られた結果から、①遊歩道だけでなく水辺に沿って移動を促すコースを設け、②水辺の活動は干潮時に限定されるため、河岸緑地内での親水要素を整備する、ことが河川空間の利用を促進・活動を誘導すると考える。これまで水辺レクリエーション、静止・休養型を重視した整備が重要とされてきたが、利用の変化から河川の状態と周辺地域や施設との関わりも重要で、それを踏まえた上で整備を行うことの重要性を示すことができたと思う。

参考文献

1) 中村良夫、岡田一天、吉村美毅「河川空間における人の動きのパターン分析とその河川景観設計への適用」土木計画学会研究・論文集 No5 p115～122. 1987
2) 山口勝、北村真一「河川における活動と空間の関連性の分析」土木計画学会研究・論文集 No. 6 p113～120. 1988